

「地域援助技術」授業研究（第1報）

Teaching Research of “Community Work” (Vol. 1)

清宮 宏臣 古川 繁子

要旨：社会福祉援助技術における「地域援助技術」の教授方法について、授業の展開やその結果などについてまとめた。授業（案）作成の過程において参考にしたテキスト等文献から、社会福祉援助技術における「地域援助技術」の位置づけや内容を概観し、学習者にとっては興味関心の薄い技術となる可能性があることを確認した。それらのことから、今回は、あるテキストを題材として用い、「地域」や「地域の構成要素」、「社会資源」について考え、理解することを目的に、KJ法によるグループワークなどを用いた授業を展開した。その結果について、学生の発表や感想から推察すると、グループワーク等を通じて、具体的に地域の構成要素や社会資源について考え、理解を深めている様子が伺えた。しかし、今回の授業は「地域」や「地域の構成要素」を理解することにとどまっているため、「地域援助技術」として必要な「組織化」や「連絡調整」などの技能の習得については、今後の課題である。

Key Words：社会福祉援助技術、地域援助技術、地域、教授方法

1. はじめに

平成12年に大改正された「社会福祉法」は、その第一条に「福祉サービスの利用者の利益の保護及び地域における社会福祉（以下、「地域福祉」とする。）の推進を図る」ことを目的とすることを定めている。

平成11年に開学した本短期大学福祉学科地域介護福祉専攻では、専攻名の頭に「地域」を冠していることから、開学当初から地道に地域交流の試みを行ってきており、その成果として昨年までに専攻教員による共同研究「地域に根ざした介護福祉士養成の実現－地域交流事業を通して－」（植草学園短期大学紀要第8号 2007）及び冊子「地域との交流8年間の教育の歩み」としてまとめられた。

日本の社会福祉全体の流れとして地域福祉の充実をはかっているが、地域福祉実現へ向けて、その方策の一端でも本学が介護福祉士養成の中で行うことができるのではないだろうかを試みている最中である。

さて、本学地域介護福祉専攻のカリキュラムである「社会福祉援助技術」では「地域援助技術」を教授していることから、「地域福祉」の担い手教育の具体的な方法を授業研究の一貫として明らかにしていくことを目的として本研究報告を上梓するに至った。

その第1報として、地域介護福祉専攻1年生を対象とした授業である「社会福祉援助技術」の2コマで行った「地域援助技術」授業の研究・展開・結果を報告する。また、2年次には「社会福祉援助技術演習」授業の中で「地域援助技術」演習を行うが、その授業の研究・展開・結果については第2報として次回に報告することとする。

また、前述の冊子「地域との交流8年間の教育の歩み」の中では、「地域福祉の実践ができる介護福祉士」が行う行為を「地域介護福祉」と命名し、本学の目指す介護福祉養成は、現代社会のニーズでもある地域福祉の実践ができる介護福祉士養成であるべきであることも論述した。しかし、具体的には「地域福祉の実践ができる介護福祉士」の教育方法は、本研究により端緒についたばかりである。1989年にコミュニティケア改革が始められ、その新しい局面の中でソーシャルワーク教育が準備されてきたイギリスの先進例を手本にすることも意義あることではあるが、そのことも本研究の第2報でふれていきたい。

2. 「地域援助技術」授業研究

2.1. 「地域援助技術」授業研究のはじまり

介護福祉士養成においては、「社会福祉援助技術」が授業科目として規定されており^(註1)、この科目では、「個別援助技術」や「集団援助技術」など、3分類された12種類^(註2)の援助技術について、その意味や方法などを理解させることが求められている。3分類には「個別援助技術」「集団援助技術」を含む「直接援助技術」と、「地域援助技術」ほか4種類を含む「間接援助技術」と、「スーパービジョン」ほか4種類を含む「関連援助技術」とがある。

本稿では、上記のようにいくつかある社会福祉援助技術のうち、「地域援助技術」に焦点をあて、その授業の取り組みに至るまでの研究内容を報告する。なぜなら、今回(2007年度)は、拙著者が「地域援助技術」を教授することとなり、どのような内容や方法で授業を展開するのが良いのか検討し、取り組んだためである。そしてまた、このことを通じて、今後の「地域援助技術」の授業のあり方について考えたためでもある。

「地域援助技術」授業研究第1弾として今回は、授業(案)作成の過程において参考にした、「社会福祉援助技術」に関するいくつかのテキスト等文献について、そこでの「地域援助技術」に関する内容を概観し、テキスト等における「地域援助技術」の位置づけについて触れる。そ

して、学生の学習段階や生活体験等を鑑みながら、「地域援助技術」の導入の観点から、今回授業で用いたテキスト『ワークブック社会福祉援助技術演習⑤コミュニティソーシャルワーク』（以下、『ワークブック』とする。）について、この『ワークブック』を活用した授業内容や、その評価などを学生の感想を中心に考察し、今後の課題などまとめたことを報告する。

2.2. テキスト等文献にみる「地域援助技術」の内容

社会福祉士や介護福祉士養成においては、社会福祉援助技術に関するいくつかのテキストがあるが、それらにおいて、地域援助技術がどのように取り上げられているかなど、このたび参考にしたテキストについて簡単に概観してみたい。

今回参考にしたテキストは7冊で、内4冊が原則や理論を中心にまとめられたもの、内3冊がタイトルに演習と記されたものを参考とした。

原則や理論を中心にまとめられたテキストでは、概ね同じような章立てで構成されている。社会福祉援助技術の基礎や概要から始まり、個別援助技術、集団援助技術、地域援助技術、社会福祉調査、社会活動法、社会福祉運営管理など、それぞれの援助技術について、その歴史や方法、テキストによっては事例を示しながら著わされている。これは、社会福祉士や介護福祉士を養成するという観点からすれば、学生が最低限学ぶべきこととして、書かれている内容が概ね同じであるのは当然のことである。

一方、演習のテキストでは、各テキストによって、内容の重点や取り上げ方などがやや異なっている。例えば、今回参考にしたテキストの内2冊は、自己理解と他者理解という内容から援助者として必要な、自分で意識していない価値や性格などに気付き、自分と他者の考え方や感じ方、価値観の相違に気付くことや、事例を通じて面接場面のあり方や面接技術の修得を、演習を通して学ぶという点では共通している。しかし、その演習の方法や取り上げる事例がテキストによって違い、社会福祉援助技術の演習テキストは、それぞれに特徴があるように思われる。したがって、教授する授業目標に応じて、どのような演習の方法をとるのか、どのような事例を取り上げるか、ということは非常に重要であると思われる。

次に、社会福祉援助技術のテキストにおいて、地域援助技術はどのような位置を占めているのであろうか。今回参考にしたテキストのうち、原則や理論を中心にまとめられたテキスト4冊についてのみであるが、表1をみる限り、社会福祉援助技術のテキストにおいては、個別援助技術や集団援助技術に関する内容に多くのページが割かれている。個別援助技術などの直接援助技術に関する内容と比較して、間接援助技術である地域援助技術の内容は少ない傾向にあり、社会福祉援助技術における地域援助技術の位置づけは決して高いとはいえないと思われる。

テキストに書かれている内容は、概ね地域援助技術の基本や歴史などから始まり、地域援助技術の展開事例が1～3事例程度記されているが、ここで重要なのが事例である。間接援助技

表 1

テキスト名	総頁数	地域援助技術の頁数と総頁数に対する割合	個別援助技術の頁数と総頁数に対する割合	集団援助技術の頁数と総頁数に対する割合
A	277頁	18頁 約6.4%	82頁 約29.6%	64頁 約23.1%
B	297頁	25頁 約8.4%	40頁 約13.4%	49頁 約16.4%
C	166頁	10頁 約6.0%	15頁 約9.0%	16頁 約9.6%
D	181頁	11頁 約6.0%	28頁 約15.4%	13頁 約7.1%

術である地域援助技術においては、取り上げる事例が学生にとってどの程度身近なものなのか、現実的で興味関心が持てる事例なのか、それによって、学生の地域援助技術に対する学習意欲が左右されるといっても過言ではないと言える。

3. 授業の取り組み内容について

3. 1. 今回の『ワークブック』等を活用した授業内容に至った理由

本学では、「社会福祉援助技術（講義）」は、1年次後期開講科目として設定され、3人の教員がオムニバス形式で、内容に応じて授業を担当している。今回、「地域援助技術」に関しては、授業回数3回（1回90分）が充てられ、その内の2回を筆者が担当することとなった。

2回の授業において、「地域援助技術」の何に焦点をあてることが、地域援助技術を理解することに至るのか。テキスト等を読んで、「地域援助技術」の歴史的な成り立ちや意味、方法などを学び理解することはとても重要である。しかし、テキスト等を読むだけで、「地域援助技術」を理解することは容易ではない。ましてや、実践する力を身につけることは更に難しい。直接援助技術といわれている「個別援助技術」や「集団援助技術」に比べて、間接援助技術といわれている「地域援助技術」は、理解できるようでできない難しさがあるように思われる。

たとえば、久保ら（2001）によれば、「（前略）間接援助技術の場合、働きかけの対象は、住民、地域社会、社会資源、社会関係などである。しかも、学習のターゲットは、組織化、連絡調整、運営管理、計画などの技術であり、学習者にしてみれば非常に抽象的なものとして受けとめられる。（中略）学習者の立場からみると、直接援助技術は講義や演習や実習をとおして、生身の人間を対象に 自己の人生や福祉の問題、あるいは人と人との関係のあり方について具体的に考えることができる。しかし、間接援助技術の学習は、学習者自身の人生や世界観とは

直接にかかわりが得難く、学習する対象や内容においても、一見具体的に見えても実は大変抽象的なのである。」(pp.186-188)と述べられている。

「地域援助技術」は、「個別援助技術」などの直接援助技術と比べると、学習者自身に身近な技術として想起し難く、ややもすると学習者にとっては興味関心の薄い援助技術となる傾向にある。「地域社会」や「社会資源」などは抽象的で、テキスト等では簡単に読み流されてしまうことも考えられ、学習者においては「地域援助技術」が身近なものに感じられず、それほど必要性はない援助技術として理解されかねない。

本学に入学してくる学生の多くは高校を卒業してきたばかりであり、まだ、若干18歳過ぎの学生である。ご近所づきあいや地縁・社会関係の希薄さなどがいわれている昨今において、そのような学生諸氏が、自分の住む町や地域の中で、住民・市民のひとりとして、どれだけの活動をしてきたであろうか。あくまで想像ではあるが、地域の中でその一員として活動をしてきたという学生が多くいるとは思えない。このように考えると、学生諸氏がテキスト等を読むだけで、「地域社会」や「社会資源」などといった対象を理解するのは容易ではないと思われる。

また、テキスト等の読了だけで、「地域援助技術」における「組織化」や「連絡調整」、「計画」などについて、「どのように実践されているのか」、「地域援助を自分ではできるのだろうか」など、自分が身につけ実践する技能という考えにまでは至らないと思われる。

そこで今回、「地域援助技術」の教授において、上記のようなことや2回の授業回数であることを踏まえ、「地域援助技術」の導入という観点から、以下のように考えるに至った。「介護福祉士としての地域援助技術とは」と大上段に構えるのではなく、まずはいったん、介護や介護福祉士という視点を脇において、ひとりの住民・市民・生活者として、実態はあるようだが抽象的で具体性に欠ける「地域」や「地域社会」、「社会資源」について考える機会を設ける必要がある。

このような方針のもと、数冊の社会福祉援助技術のテキスト等を概観した中から、地域援助技術に焦点化したテキスト『ワークブック』の「chapter 2『地域』とは何か～コミュニティの意味」(以下、「地域とは何か」とする。)を題材として用いることとした。

また、このテキストを活用するとともに、「社会資源」や「地域」についてより広く、より深く考えることや、他者の考えや発想を共有しながら学びを深めていくことをねらいとして、KJ法も用いた。「地域」について、自分が考えたことを他者と話し合いをしながら模造紙に図解化していくグループワークを行い、授業を展開した。

3.2. 今回の授業のねらいと目標

以下のような「ねらい」と「目標」を設定し、3回の授業の内、1回目を古川准教授に教授していただき、残りの2回を拙著者が担当した。

(1) ねらい

- 1) 地域援助技術の原則や構成要素を学ぶ。
- 2) 「地域」を感じる写真を撮るという方法を用いて、「地域」の意味を考える。
- 3) 個々それぞれに考えた「地域」の意味について、他の人の考えを聞く機会や話し合う機会を通じて「地域」について改めて考え、「地域」の構成要素やそれら要素の関係性について考える。たとえば、「地域」について、近隣や行事等で集まる「人・関係」やお祭りやバザー、スポーツ大会などの「行事・組織」、田畑や施設、交通機関など「自然・生活環境」、特産物や習わしなど「伝統・文化」、行事等への参加意欲やわが町への思いなどの「意識」、というように「地域」を支え、構成しているであろう要素をあげ、それらを整理して捉えることができる。

(2) 到達目標

- 1) 地域援助技術の原則（歴史等）や構成要素があることを知る。
 - 2) 地域援助技術における「地域」について、自分なりに「地域」の意味を理由づけして説明することができる。
 - 3) 地域援助技術における「地域」を構成する要素やそれら要素の関係性について説明することができる。
 - 4) 地域援助計画を立てる方法を学ぶ。
 - 5) 地域援助計画の評価をしながら、一連の地域援助技術の流れを学ぶ。
- ※ 4) と 5) については、2 年次前期の社会福祉援助技術（演習）での到達目標。

3.3. 授業の概略

ここでは、筆者が担当した 2 回の授業内容について詳述する。

上記のような、ねらいや目標から、前述した『ワークブック』の「地域とは何か」を引用・参考題材とし、この題材を足掛かりに展開した今回の授業の概略を以下に記す。

- (1) 授業の 1 週間前に以下のような課題（課題シート）を出した。
「地域」を感じる写真を 1 枚撮り、「課題シート」に貼る。なぜ、その写真を撮ったのか（「地域」を感じた理由）を「課題シート」に書いてくる。
- (2) 授業当日は、5～6 名程度の小グループを作り、この「課題シート」を用いて、写真とその理由を同じグループメンバーに説明をする（ひとり 3 分程度）。（ここまでの『ワークブック』「地域とは何か」より）
- (3) いったんグループを解散し、他の人の「地域」を感じる視点を参考にしながら、再度「地域」とは何かを個々に考える。ここでは、KJ 法を用いて、付箋紙でラベル化する（ひとり 10 枚）。

- (4) 再び前述と同じ小グループで、各々の付箋紙をもとに話し合いながら、付箋紙を整理、編成する。模造紙に付箋紙を貼って関連付けながら図解化して、模造紙に描く。
- (5) 図解化した模造紙について各グループ発表（各グループ5分程度）
- (6) まとめ。

これらを展開するにあたり、配慮・工夫した点として、①「課題シート」の写真については、現像等をする負担を考え、既に現像してある写真、新聞や雑誌等の切り抜きでも構わないこととし、②授業のねらいの3)にあるように、他の人の考えを聞いて「地域」の意味を再考することができるように、単に話を聞くだけでなく、他の人の話（その写真を持ってきた理由）が記載できる用紙を用意した。なお、これらの内容を2回の授業時間に分けて行い、1回目の授業90分と2回目の授業前半20～30分を上記(2)～(4)までの作業に充て、残りの時間20分を発表、40分をまとめとした。

4. 学生の様子や感想からの考察

学生の授業への取り組みの様子について、1回目および2回目ともに比較的熱心に取り組んでいたように思われる。1回目の授業時に、数名の学生が写真を持参して理由を書く課題をしてこなかったことはあったが、課題をしてこなかった学生も、グループでの作業等に取り組んでいた。なお、課題をしてこなかった学生には、応急措置的ではあるが、その場で絵を書いて即興で理由を述べてもらった。そうすることで、一応は、「地域」について自分なりに考えることになり、グループワーク参加の機会を逸することにならなかった。

以下、学生の感想を整理すると、

- (1) 地域を感じる写真を持参し、お互いの話を聞いたことについて、「自分ひとりで考えると全然『地域』が何なのかわからなかったけど、みんなの発表を聞いて、『これも地域なんだな』とすることが出来た」や「人それぞれ地域を感じる写真が違って、景色、人、物などさまざまなもので、私たちの地域を支えてくれていると改めて感じました」など同様の感想が多数あった。学生は、「地域」というものを改めて考えると、捉えどころのない難しさを感じながらも、自分なりに「地域とは何か」を考える機会となり、他の人の写真や考えを聞いて自分が想像していた以上に、「地域」の感じ方や捉え方に違いや広がりがあることを感じているようである。一方で、同じような写真、例えば、納涼祭などお祭りの写真や山や田畑など自然の写真など、互いに共通、共感するところもあり、「地域」に対するそれぞれの思いを分かち合い、「地域」がより身近な存在として認識されている様子もあった。
- (2) KJ法を用いたグループワークについて、「(前略) 思っても言えない部分が、KJ法だと簡単なことばとして思っている事が言える良さがあり (後略)」、「地域を構成するものを

付箋紙に書いて貼って、まとめることでとても見やすくなるし、それらのものから地域が構成されているんだということがわかりやすかった。これも班によって書き方が色々で自分達では出なかったものとかもたくさんあって、そういえばそうだな、と思うことがあった」などの感想が多くみられた。

- (3) 授業後、「地域」について（地域に対する思いや考えなど）何か変化があったかどうかについて、ほとんどの学生が変化があったと答えている（49名中5名の学生が変化がなかったと答えている）。例えば、「こんなにも地域について考えたことがなかったから、地元でもまだまだ知らないことは多いものなんだな—と思いました」や「地域は自分たちが見えない所まで配慮していたりするんだと思ったし、自分たちが知らないことがまだまだあるだろう（中略）自分が当たり前だ（と思；拙著者加筆）ったことも、感謝に変わるんだろうと思った」、「人と人のつながりだけだと思っていたけど、回覧板などの情報の共有も地域に関することだとわかった」、「いつも自分のいる地域だけど、全く思いとかもなく、ただ住んでいるだけだった。でも、この授業で考えることが出来た。（中略）これからはもっと興味や関心をもちたいと思いました」、「地域に対しての親密感が持てた」など、学生はこの授業を通して、地域のことをより深く考え、より身近なものと意識するようになったと思われる。

このように(1)と(2)から考えられることは、まず、課題を通じて自分ひとりで考える段階、次に、お互いの話を聞いて違いを感じたり共感したりする段階、そして、KJ法で付箋紙に書き出す作業を通じて再度自分で考える段階、と徐々に「地域」が具体化されていき、「地域」の広がりや奥深さを考えることへとつながっている。具体的に書かれた付箋紙1枚1枚をグループごとに整理、編成していく中で、「地域」を構成する全体像や、「地域」の中にある「社会資源」が、模造紙上ではっきりとした形となって現れてくることで、学生にとっては理解しやすいものとなっているようである。

また、KJ法によって模造紙に図解化したものやそれらについての学生の発表では、付箋紙に書き出された地域の要素にやや偏りが見られたものの、具体的にいくつかの地域の要素が書き出されていた。

たとえば、付箋紙に書き出された要素として「祭り」というものが多く、「運動会」や「花火大会」など「行事」に関する内容が多かった。また、「学校」や「公園」「広場」といった要素も比較的多く書き出され、それらを「人が集まる場所」というカテゴリーで整理していた。「人が集まる場所」とは、行事や催し物によって人が多く集まる場所というイメージと近隣の友達が集まり、思いきり遊んだあるいは勉学に勤しんだ昔懐かしい場所というイメージがあるように思われる。このように「行事」や「人が集まる場所」と整理された要素が多かった。

そして、「市役所や病院や神社、レジャー施設」「田畑、海川」「バスや駅の交通機関」などの「自然・生活環境」、「絆」「協力性」「積極性」などの「意識」、「子供会」「自治会」などの「組織」、「ピーナツ」「特産物」「その土地ならではの行事」などの「伝統文化」、というようにグループによって偏りはあるが、これらの要素があげられていた。また、少数ではあるが、「回覧版」「掲示板」などの「情報」というカテゴリーで整理したグループもあった。

このように付箋紙に書き出される地域の要素について、整理の仕方や書き出される要素の偏りはあるが、具体的にたくさんの要素が書き出されていた。また、少数意見も、グループ全体あるいはクラス全体で共有することによって新たな気付きとなり、グループワークによる効果があると思われた。

5. まとめと今後の課題

「地域援助技術」の教授に際し、今回は、学生の学習段階等を鑑みて、地域を援助する「技術」を教授するというよりも、「地域」や「社会資源」について、グループワークなどを通じ、それらをより身近なものとして具体的に考えることに重点をおいた。その結果、学生は、「地域」に対する思いや考え方を新たにし、「地域」が自分自身に身近な事柄として意識化されたと思われる。また、「地域」の中にある「社会資源」の発見や再確認など、地域の構成要素をより具体的に理解することができ、今回の授業のねらいや到達目標の観点からすると、ある程度達成したと思われる。

しかし、数名の学生は、授業後に「地域」に対する考え方に変化がなかったと答えている。ある学生は「前から地域とのつながりが強かったので特に変化はなかった」と答えている。これは、日常的に「地域」の人間や社会とのかかわりがあり、「地域」が身近な存在として既にあることを意味していると思われる。学生が普段から「地域」を身近な存在として感じられるような生活をしているということを前向きに評価できる一方で、このような学生に対する授業のあり方については、今後の課題である。

また、今回は、社会福祉援助技術としての「地域援助技術」という視点は、本授業のまとめのところで若干触れる程度に留めたため、「地域援助技術」として身につける、「組織化」や「連絡調整」、「計画性」などの技能については、現時点では身につけるところまで至ってはいない。「地域援助技術」について、実践できる技能を、どの程度、どのようにして身につけていくことが学生には可能なのか、それらについての教授のあり方は今後の課題であるが、本研究 Vol. 2 として、2 年次に行われる「社会福祉援助技術演習」の授業の中の、「地域援助技術」演習授業研究にて報告する予定である。

(資料1) ワークシート

社会福祉援助技術－地域援助技術2と3－

ワークシート

①グループワーク（その1）

○グループ（1グループ6人程度）に分かれ、1人ずつ「課題シート」をみんなに見せながら、自分の撮った写真の説明と撮った理由を述べる（1人3分程度）。

・司会進行

・書記

・発表者

を決めてください。

○他のグループメンバーそれぞれの写真についての話をメモする。

☆氏名：さん

・撮ってきた写真の場面（風景）

・撮った理由

☆氏名：さん

・撮ってきた写真の場面（風景）

・撮った理由

☆氏名：さん

・撮ってきた写真の場面（風景）

・撮った理由

☆氏名：さん

・撮ってきた写真の場面（風景）

・撮った理由

☆氏名：さん

・撮ってきた写真の場面（風景）

・撮った理由

☆氏名：さん

・撮ってきた写真の場面（風景）

・撮った理由

註

- (1) 詳しくは（通知）社会福祉士養成施設等における授業科目の目標及び内容並びに介護福祉士養成施設等における授業科目の目標及び内容について（昭和63年2月12日社庶第26号、各都道府県知事あて、厚生省社会局長。最終改定平成14年4月1日社援発第0404015号）を参照いただきたい。
- (2) 古川繁子ほか（2004）『新版事例で学ぶ社会福祉援助技術』学文社を参考。

文 献

- ・根本博司ほか（1998）『介護福祉士選書・5 三訂社会福祉援助技術』建帛社.
- ・黒木保博，佐藤豊道，白澤政和ほか（2006）『新版介護福祉士養成講座⑤/第3版，社会福祉援助技術』中央法規.
- ・米山岳廣（1999）『社会福祉の援助技術』文化書房博文社.
- ・古川繁子ほか（2004）『新版事例で学ぶ社会福祉援助技術』学文社.
- ・久保絃章（2001）『社会福祉士・介護福祉士講座 社会福祉援助技術演習』川島書店.
- ・岡本民夫（1998）『社会福祉援助技術演習』相川書房.
- ・筒井のり子（2004）『ワークブック社会福祉援助技術演習⑤コミュニティソーシャルワーク』ミネルヴァ書房.